

挿絵のタルタラン

加藤 林太郎

①かつて南フランスの絵葉書について書いた中で筆者は次の様に述べた。「そうした中に混って不思議な絵葉書を我われは見出すのである。丘の頂に立つ一基の風車、そしてその横には赤いトルコ帽をかぶり、大げさな黒ひげを生やし、腰には弾薬帯、脚にはブーツ、手には猟銃といった恐ろしげな巨大肥満の男がいる。これは誰か？風車小屋に立て籠った凶悪犯人ででもあるのか？実は全く別の二作品が、合わせて一つの場面にまとめられているのだ。さすが南フランスならではの呑気さ加減が生み出した絵葉書である。その二作品は、それぞれが南フランスの一つの町と一つの村を観光名所としたのであって…⁽¹⁾」風車とタルタランがドーデの小説を代表してプロヴァンスの文学・観光イメージの立役者であることをこの一枚の絵葉書は示しているが、また同時にタルタラン像に一定の型が要求されていることも示しているだろう。アルル近郊の小村にてはあるまじき姿。そのタルタラン像の発生源が作品中の描写にあることは勿論である。「タルタランはアルジェリアへ行くからには、アルジェリアの服装をするのが義務であると信じたのであった。(…)頭の上にかぶった巨大なトルコ帽には、青色の縞が長々とたれている！…こうした服装のところへ、左右の肩に一挺ずつ重い小銃をかつぎ…⁽²⁾」そして作品から抜け出して観光的キャラクターとなるためには、描写に忠実な正装をこらしてアイデンティティを明らかにする必要があるだろう。しかし書物の中の挿絵はちがう。作品の各頁に依存しているが故に、必ずしも文中の描写を絵で繰り返す義務はなく、かえって自由であろう。極端な場合、一卷を通して画面に全くタルタランが現れなかったとしても挿絵の用は果たすかも知れない。また挿絵に主人公が現れたとし

ても、それがタルタランであることを示すのに上記絵葉書なみに「完全なタルタラン」を描き出す必要もない。そして実際、タルタラン挿絵史の一世紀は、この挿絵の自由を時に行使したと思う。即ち『タルタランの大冒険』の挿絵は全てが同様ではない。主人公タルタランの登場する度合も一様ではないし、タルタランの肖像の忠実度も一定ではない。タルタランには『人間喜劇』におけるシャルル・ユアールのその様な決定的な挿絵はないけれども、折しも挿絵の黄金期であったから、そこにはタルタランのイコノグラフィを云々することのできるヴァリエーションが存在する。この様な「忠実から自由へのヴァリエーション」が以下に考察しようとするところのものである。

②タルタランの挿絵は、1869年12月9日「ル・プティ・モニトゥール・ユニヴェルセル」紙に連載第一回として、序言と第一章冒頭部分が掲載された時に始まる。描いたのは友人の画家エミール・ベナッソ⁽⁶⁾であった。ただしそれは場面に即した挿絵とは言えず、むしろ作品紹介の口絵であろう。タラスコンの町の広場に建てられたタルタランの立像、銃の台尻を地面に突き、倒したライオンの頭を踏まえ豪然と構える紛うかたなき英雄像である。しかし実はまだ「タルタラン」の像ではないのだ。なぜならば像の台座には「タラスコンの町よりバルバランへ感謝をこめて」と刻まれてあるからである。所はタラスコン、記念されているのは獅子退治の豪傑であろう。しかし彼はタルタランではない。上記連載『バルバラン・ド・タラスコンの大冒険』は第一部で中断し、ついで「フィガロ」紙に移って完結したが、作者が『我が書の来歴』で語るところによると、南仏在住のバルバラン姓の人物から苦情が出て、ダンテュ書店から出版予定の同書は急遽校正の段階で『タルタラン・ド・タラスコン』に変更されたものである。かくして我々はベナッソ描くバルバランの立像をタルタランの最初の挿絵とみなしてよいことになるのである。主人公の名はかく帰するところに迷ったのだが、タルタランのスタイルは早くも連載第一回で定型の方向へ踏み出したと言える。なぜならその立像は外でもない、タルタランがアルジェリ

アへ出発の朝、門前を埋め尽くす群衆の前に現れて度肝を抜いた晴れの出で立ち、あの「トルコ人+狩猟家」であるからだ。ただしベナッは作品の結末を先取りした。タラスコン市民の空想の翼に乗って、なるほどタルタランは記念像にふさわしい英雄に納る。しかしそうなるのはまさに最後の二頁に於てであろう。「ル・プティ・モントウール」の読者は、その最後の二頁はおろか、主人公がアルジェリアの土を踏むのさえ見なかった。タルタランが俗流オリエンタリヤの出で立ちでマルセイユの港へと到着した所で連載は中断したのであるから。口絵が作品を説明するどころではない。逆に、妙な口絵の「説明がつく」のを待って連載は中断されたという方が正しい。ベナッはミニ版ギュスターヴ・ドレとも評された画家であるが、『タルタラン』の挿絵にはドレの叙事詩的反省略などは見られず、漫画調も時に混えたクロッキーが主人公の無邪気な虚栄心を表現している。「エミール・ベナッの面白い挿絵を入れて連載したが、まったく不成功に終わってしまった。⁶⁾」と作者が語っているように、『タルタラン』最初の挿絵は「第一の物語」(本来三つの物語で構成される)のみで終り、「不成功」の運命をともしたのであった。

③かつて半無名状態にあったドーデの『風車小屋便り』を出版してくれたエトセル書店が、少年読み物としてドーデ集を出した(1884)。『ナバブ』はじめ全八篇の抜粋から成る中に『タルタラン・ド・タラスコン⁶⁾』はエミール・バイヤール⁶⁾の挿絵で飾られている。バイヤールは高名な画家であって、挿絵にとどまるものではなく、パレ・ロワイヤル座のロビーの壁画を担当したことで知られている。十二点と数は少ないながらも、本篇の主たるエピソードは、帽子射ちからラクダ騒動に至るまで一応揃っている。もっとも全十二点の半分に当る六点到ラクダが描き込まれていて、そのうちの二点にはタルタランはおらずラクダだけである。これは比率の上で、他の挿絵には見られない特徴であろう。作品後半、主人公がライオンならぬラクダと妙に縁が深くなってしまふのは本当だが、恐らくこの動物のエグゾチックで滑稽な姿だけで、アフリカと

いう背景と猛獣狩りの幻滅とを端的に描き出せること、こゝに画家のラクダ偏重はおのずから生れたのであろう。しかしバイヤールの挿絵には、逆に他の挿絵版に必ずある一場面がないのである。それはタルタランの英雄的ライオン狩りに足止めを食わした不名誉な事件、即ちにセアラビア女パイアとの生活を語る章が省かれているからである。この省略にドーデは不服だったというが、その後現れる少年版、教科書版に常に見られることである。バイヤールの挿絵には、遠近法、プロポーション、表情などに滑稽的な誇張は少いが、町へやって来た移動動物園のライオンとタルタランがにらみ合う場面で、彼の両の眼から二本の光線がライオンめがけて飛び出しているのは面白い。この場面の挿絵の代表と言える。

④ダンテュ書店の挿絵版(1887)⁽⁹⁾は、挿絵の点数に関する限り最も豊富な版である。ジャニオ⁽⁸⁾によって『タルタラン・ド・タラスコン』は初めて全場面が絵になったのである(コマ絵も入れると151点)。漫画風に表現されてはいるが、端正な挿絵であると言えよう。常に水平位置でとらえられた画面に騒々しさは感じられない。しかしタルタランの表情には専ら好人物と言った印象のみを受け、虚栄家でメガロマヌたるタルタランの威張った顔付きはあまり期待できない。もっとも挿絵の豊富さのおかげで、物語を細大洩らさずたどれることは間違いない。なぜなら、作者があちこちに散りばめる皮肉な細部描写を、ジャニオの挿絵はコマ絵で捨うからである。冒頭、タルタラン邸の庭では巨樹バオバブ樹もちんまりと植木鉢におさまっている…と言った場面などはまだ「細部」とは言えない。タルタランのライオン狩りへの出発が決って(と町の人たちが思い込んでいるだけだが)、客間の話題が猛獣狩りで持ち切りとなり、そのため夜の歌唱の集まりも開かれなくなってしまおうというくだりで、「客間ではピアノもおおいをかぶって退屈顔であった。ピアノの上には、ハンミョウが何匹も裏返しでひからびていた。⁽⁹⁾」とあるのをジャニオは挿絵に入れた。もっとも文中では「ハンミョウ」とあるのに、絵では蠅らしい虫が数匹ころが

っている。ドーデはファーブルではないから、画家も昆虫の分類にこだわらなかったのであろう。アルジェの賭博場で偶然再会したグレゴリー殿下（実はパてん師）と再会を祝して杯を重ねたあと「勘定を払ったのはタルタランであった」という一行をも画家は大小二点の絵にした。勘定書をのせた小皿を差し出す手、これはその後の挿絵が倣うところとなったものである。ジャニオの挿絵が端正であくのないものに思える理由のひとつに、暗示的描写をあげることができる。タラスコン出発の朝、邸前に詰めかけた群衆の前へ、毛虫のように武装したタルタランがトルコ人スタイルで現れる場面、これは「初代」挿絵家のベナッシ以来、タルタランの晴れ姿として誰もが一頁を当てるのである。そしてこの場面におけるタルタランこそが恐らく後日定型化を見たと言えよう。いわば原タルタランである。ところがジャニオはこれを想像に任した。と言うより暗示したのである。武器などの荷物が路上に持ち出され、男女群衆は所狭しと押しかけている。中には樹上に陣取るものもある。そして彼等全ての視線は一方方向に集中する。しかしタルタランその人は画面にない。もうひとつのタルタランの晴れ姿、それは末尾の章、タラスコンへの凱旋（町の人はタルタランの大猛獣狩りを勝手に空想して熱狂した）の場面であろう。「タルタラン万才！大ライオン射ち万才！」の大歓声と共に吹奏楽と男声合唱が湧き起こる。こゝでも画家は遠く駅頭に現れたらしい郷土の英雄へ群衆が帽子を打ち振りつゝ駆け寄らんとする有様を、群衆の背後から描いている。我々が見るのは専ら視線の集中であると言えよう。大衆の評判が幸福でもあり不幸でもある虚栄家タルタランの最大の関心事は群衆の視線だと考えるならば、ジャニオの挿絵の右に出るものはないであろう。ちなみにフロベールの目にとまった初版『タルタラン・ド・タラスコン』（1872）はダンテュ書店版でも挿絵入りではない。

⑤同じ1887年刊行のマルボン・フラマリオン版「コレクション・ギョーム」の一冊としての『タルタラン⁹⁹』には五名の挿絵家が名を連ねている。その中の一人ロッシ¹⁰⁰の筆になるタルタランの上半身像が表紙絵となっているが、赤い

トルコ帽と銃，この二つがタルタランの必要かつ十分な表徴であることが分かる。「コレクション・ギョーム」版は絵入りで，ドーデの主たる作品は小説，戯曲ともにおさめる普及版であるから，おびただしく版を重ねたであろうと思われる。手元にある版（1930年）は第281刷である。ペーパーバック出現以前のポピュラー版であると言える。挿絵の点数もジャニオを少し下廻るだけであって，主な場面を網羅している。後デュトリアック⁹⁴の加わった版も出たが，その結果，同一場面に対して二名の画家による挿絵が競作となる場合も生じる。「第一の物語」の第六章「二人のタルタラン」はその良い例である。「ドン・キホーテとサンチョ・パンサの御両人が同じ一人の人間の中に同居しているのである！ この二人の仲がどんなに悪いか！ どんなけんかがおっばじまるか！ どんな騒動が持ち上るか！ …は想像がつくだろう。」⁹⁵ 冒険を夢見はするが，その実臆病というタルタラン気質を面白おかしく語った一節は，まさに戯画には持って来いなのである。ダンテュ版のジャニオの挿絵では，読書中に眠り込んだ部屋頭巾のタルタランから，ソーラートピー式ヘルメットを着用した探隊家スタイルのタルタランが立ち上って腕をふり上げている。さてフラマリオン版においてモンテギユ画⁹⁶の「二人のタルタラン」は，剣をつり，拍車つき長靴のタルタランが，背に生えた翼をひろげて進軍を叫ぶ。部屋頭巾のタルタランは，首にひもをつけられていやいや引きずられて行くというものである。一方デュトリアックの挿絵は作者の記述に即したもので，腕組みして思案するタルタランの左からは長槍を構えた重武装のドン・キホーテ，右からはサンチョ・パンサがそれぞれタルタランを冒険あるいは安穩へと説得せんとしている。ともかくこの場面を無視する挿絵はなく，作品の記述に即するか離れるかによって挿絵に最もヴァリエーションの生ずる一章である。タルタランの容貌のみに限れば「年の頃は四十から四十五，ずんぐりむっくりで赤ら顔である。（…）短く刈った濃いひげに両の眼は爛々としている。」⁹⁷ という冒頭の章の主人公紹介に最も即しているのは全挿絵版を通じてフラマリオン版のデュトリアックの挿絵である。そのタルタランの表情は，「虚栄家の憂うつ」という

ドーデの主題を引き受けるにもまた適したものであると言える。他にデュトリアックのみの大型版も存在し、挿絵の点数も上記の版におけるデュトリアックよりもいくらか多い。

⑥二十世紀に入ってから『タルタランの大冒険』の挿絵は続く。1930年代の三つの版はいずれも話題作と言ってよく、見飽きるということがない。リブリー・ド・フランス出版の「決定版」ドーデ全集はドーデ作品集の代表であるが、これは「挿絵入り全集」としてなら文字通り決定版の地位を保つに違いない。第四巻『タルタランの大冒険』(1930)¹⁰⁴は、色刷り八点を含むエディ・ルグラン¹⁰⁵筆の三十点の挿絵で飾られている。いずれも頁付けとは別の大版の挿絵で、そのカリカチュア調の大胆な採色と画風は、これまでに挙げた十九世紀の挿絵版には見られないヴァイタリティにあふれている。テキストのデフォルメはほとんど見られず、むしろ誇張的表現であろう。帽子の空中射撃の場面の構図などはエトセル版のバイヤールの挿絵と変る所がない。「二人のタルタラン」の表現も正統派的で、馬上のキホーテ・タルタランのわきを部屋頭巾のサンチョ・タルタランがろばにまたがって行く。遠景に見えるのは有名なタラスコンの城である。エディ・ルグランの挿絵三十点の特徴は、動的な群衆が画面にあふれている一方、主たる登場人物それぞれのポートレートが静かに厳(いび)しく独立の一枚を占めていることであろう。町の軍人族を代表するブラヴィダ、嫉妬家のコストカルド、貴公子然たるべてん師のグリゴリー殿下など、「肖像」だけで優に全体の五分の一を占める。本版の挿絵の雰囲気はドーデの本文よりずっと騒々しいが、これら非動的な肖像の存在が挿絵の動の過剰を中和していると言える。エディ・ルグランは同全集のタルタラン三部作全ての画家でもあるから、本全集のタルタランは挿絵の上でも立派に「人物再登場」を果すことになった。

⑦「決定版」全集刊行のあとを受けて現れたのがラウール・デュフィ¹⁰⁶のリト

グラフによる限定版⁸⁴である。二十世紀初頭によく見られる巨匠版、美本のための美本であって、往々にして挿絵が主でテキストが従の関係を持つが、これもその例に洩れないと言えよう。もっともデュフィはこの仕事を無考えに引き受けたようである。いざ『タルタランの大冒険』を読んでから困った。気に入らなかったのである。モダンでスマートなデュフィの画風からすれば、寸足らずの知性に満足したような野暮くさい男が主人公に納まるドーデの小説はどれも向かないに違いない。依頼主に作品の変更を求めたが折り合いがつかなかったのである⁸⁵。しかしこの様にして生れたデュフィの『タルタランの大冒険』は1930～46年代の美本選定で十五点中の三位に選ばれ、「タルタラン挿絵史」の輝く一頁となった⁸⁶。全二百頁中の半分に当る百頁に挿絵が入るぜい沢な版である。ただしその百点の挿絵のうち主人公タルタランが登場するのはただの十五点に過ぎない。「タルタラン出現率」は極めて低い挿絵なのである。他の八十五点はいつに変わぬデュフィの風景である。軽やかに重なり合う樹々と建物、透明なシルエットとも呼ぶべき男たちや女たち。いわばタルタランのいない舞台の書き割り、デコールといった挿絵が大半を占める。にせアラビア女バイアを、「タルタラン抜き」でオダリスクとして描いた一点などにも同じ調子が感じられる。たまに現れるタルタランも、頭にトルコ帽、腰に弾薬帯、手には猟銃といった物々しいスタイルとは言えず、こゝでも「タルタランばなれ」の印象を受ける。気の進まなかったデュフィではあるけれども、プロヴァンスとアルジェリアというやゝエキゾチックな風物を提供する限りにおいて、『タルタランの大冒険』の中に、それなりに興味ある要素を見出したのではあるまいか。

⑧戦雲が欧州の空を覆った1939年に現れたのがアルベール・デュブー⁸⁷の漫画挿絵⁸⁸であったのは皮肉な偶然であるかも知れない。この版は、デュブーが1930年代後半に挿絵を入れたいくつかの文芸作品の一冊である。『ガルガンテュワとパンタグリユエル』『ドン・キホーテ』『風流滑稽譚』『ヴィヨン詩集』な

どにデュブーの愉快な群像が乱舞した。デュブーの愉快さは敢て絞るならば文芸作品の破廉恥的解釈にあると言えよう。『ガルガンテュワ』のテレームの僧院は、「汝の欲するところを為せ」の掟に無邪気に従う青年男女の群によって文字通り「破廉恥学園」と化している。また『ヴィヨン詩集』の一頁を占める挿絵では、逃げるヴィヨンの後から足を生やした絞首台が追っかけて行く。『絞罪人のバラード』にこれ以上に型破りな挿絵は望めまい。この型破りの解釈を『タルタランの大冒険』にも求めるならば、それはアルジェリアへ渡るタルタランの出で立ちに見出すべきである。頭の天辺から足の先まで「トロッコ人」、サングラス、弾薬帯にライフル銃という伝統的セットにデュブーは引導を渡したのである。全百十五頁のうちの六十五頁に挿絵があるが、そのうちの四十一點にタルタランは登場する。デュフィに比べ登場率は格段に高い。更にこのうちの過半数すなわち二十四點がタラスコンを出発してからのタルタランである。「正統的」理解では全てそれらは「トロッコ人」であらねばならない。ところがデュブーのタルタランは作品に従わない。敢然として、より正統的で合理的なハンター服を着こみソーラートピー式ヘルメットを着用して出発したのである。この出で立ちで銃を肩に、沿道で見送る群衆に挨拶を送りながらタルタランは駅への道を進んで行く。書物がたしかに『タルタランの大冒険』でなければ、また街路樹の幹に「タルタラン万才！」の落書を認めるのでなければ、それがタルタランだとは見極めかねるであろう。ただしトルコ帽が全く姿を消したわけではない。ヘルメット姿十四點に対し四點がトルコ帽である。エピソードにトルコ帽が登場して一役演じる頁では、一時本心に復した挿絵であろうか。デュブーの「型破り」の楽しみならば実は各頁に見出すことができる。書齋の壁を飾る蒐集武器の真中に自動小銃（まだ存在しない）がおさまり、しかもその銃口からは今しも白煙が立ち登っているではないか。しかしドーデの笑いはラブレー的デュブーにとっては役不足であろう。『ガルガンテュワ』のピクロコル戦争の画面を埋め尽す戦士たち全てを見つけ出すには休みを三日は取る必要があるとマルセル・エームは言ったが⁸⁴、その様は濃密な画

面をこゝに求めるわけには行かない。戦後刊行された挿絵版も相当数あるが、デュブー的逸脱は見られない。

⑨本邦初訳と言われるのは『快男児¹⁾タルタラン²⁾』であるが、デュトリアックの挿絵を二点借用している。邦訳中異色と言えるのは旺文社文庫の『タルタランド・タラスコンの大冒険³⁾』であろう。徹頭徹尾背広スタイルのタルタランなのである。タルタランの顔が完全な円形であるなど漫画調であるが、銃の代りにはパイプとステッキといった町人風こそパロディのパロディという愉快感を生み出しているのである。型破りの解釈にかけてはデュブーも及ばない。現行のペーパーバック版は表紙絵に既存の挿絵を用いてはいる。しかしリーヴルド・ド・ポッシュ版(1985)のデュブーの表紙絵は、砂漠で難渋するタルタランだが勿論ソーラートピー型ヘルメット。一方フォリオ版(1987)の表紙はデュフィで、倒したライオンを引きずるタルタランだがこちらは無帽。トルコ帽がタルタランの象徴であり、南仏の一小都では脱ぐわけに行かないならば、現代の挿絵家はその「自由」をこの重要な被り物の追放に用いたと言ってもよい。その結果テキストとテキスト離れたタルタランの挿絵との間には一種の面白い緊張関係が生れているとは言えよう。ともあれ、六月のタラスク祭のパレードの花形として町の観光に一役買っているタルタランの扮装と現代の挿絵家の筆になるタルタランが、まさか同一人物とは恐らく誰も気づかないであろう。

注

- (1) 「クレセント」(関西学院大学) 第16号 昭和59年。
- (2) Alphonse Daudet : Oeuvres I, Bibl. de la Pléiade (1986) p. 498.
- (3) Emile Bénassit (1833-1902)
- (4) Alphonse Daudet, op. cit., p. 576.
- (5) Alphonse Daudet : Contes choisis : Ed. spéciale à l'usage de la jeunesse, Bibl. d'éducation et de récréation, J. Hetzel, 1884.
- (6) Emile Bayard (1837-1891)
- (7) Tartarin de Tarascon par Alphonse Daudet, Editions Dentu, 1887.

- (8) Georges Jeannot (1848-1934)
- (9) Al. Daudet, *Bibl. de la Pléiade*, p. 492.
- (10) Collection artistique Guillaume et Cie, A. D., *Tartarin de Tarascon*, En Vente chez C. Marpon et E. Flammarion, 1887.
- (11) Lucius Rossi (1846-1913)
- (12) Georges-Pierre Dutriac (生没年不詳)
- (13) A. D., *Bibl. de la Pléiade*, p. 484.
- (14) Louis Montégut (1855年生. 没年不詳)
- (15) *ibid.*, p. 474.
- (16) A. D., *Tartarin de Tarascon*, Lib. de France, 1930.
- (17) Edy-Legrand (Edouard-Léon-Louis) (1892-1970)
- (18) Raoul Dufy (1877-1953)
- (19) A. D., *Tartarin de Tarascon*, *Scripta et Picta*, 1937.
- (20) *Le Portique*, No. 4, 1946.
- (21) *Le Portique*, No. 7, 1950.
- (22) Albert Dubout (1905-1976)
- (23) A. D., *Tartarin de Tarascon*, *A l'Emblème du Secrétaire*, 1939.
- (24) Dubout, Ed. *Art et Technique*, 1940, Préface.
- (25) 藤沢古雪訳. 世界少年文学名作全集第10巻, 家庭読物刊行会, 大正9年。
- (26) 辻 昶訳, 桑原伴之挿絵, 1980。

参考書

- (1) E. Bénézit : *Dict. des peintres, sculpteurs, dessinateurs et graveurs*, 1976, Lib. Gründ (éd. orig. 1911-1955)
- (2) Marcus Osterwalder : *Dict. des illustrateurs 1800-1914* Hubschmid & Bouret, 1983.
- (3) L. Carteret : *Le Trésor du bibliophile/romantique et moderne 1801-1875*, L. Carteret, Editeur, 1924-1928.
- (4) Jules Brivois : *Essai de bibliographie des œuvres de M. Alphonse Daudet*, Burt Franklin, New York, 1970 (éd. orig. 1895)
- (5) Daudet : *Tartarin de Tarascon*, éd. de J.-H. Bornecque, Garnier, 1968.

(関西学院大学文学部教授)